

# 東北 VALUE SIGHT 山形



東根市教育長  
石山 泰博 (いしやま・やすひろ)

山形県東根市生まれ。  
1973年3月山形大学理学部卒業、同年4月西置賜郡白鷹町立白鷹東中学校教諭となる。  
2000年4月より北村山教育事務所長、東根市立第一中学校長、村山市立楯岡中学校長を歴任し、2009年3月に定年退職。  
2010年11月に東根市教育委員となり、同時に東根市教育委員会委員長に就任、2015年4月から東根市教育委員会教育長に就任し、現在に至る。

東根市教育委員会  
山形県東根市中央一丁目1番1号  
東根市ホームページ  
<http://www.city.higashine.yamagata.jp/>

● 平成27年1月、文部科学省が公立小中学校の統廃合に関する手引きを公表した。手引きでは、小学校で6学級以下、中学校で3学級以下の学校は統廃合の適否を検討するよう自治体に求めている。山形県教育委員会によれば、県内の小学校のうち6割程度が対象になるという。

● そのような状況下、東根市では統廃合によらず、小学校を活性化させるために創意工夫をこらした取り組みが行われている。

## 教育による まちづくり ～東根市立高崎小学校の取り組み～

### 小規模特認校制度の導入

東根市では平成27年度から、市内の高崎小学校に、小規模特認校制度を導入し、他地区からの児童の通学を認めている。

小規模特認校制度とは、文部科学省が示す通学区域制度の弾力的運用の一つで、児童生徒数の少ない小中学校で通学区域の制限を外し、他学区からの通学を認める制度である。この制度により平成27年度に5人、平成28年度には、さらに7人の児童が他地区から通学している。

### 小学校は地域コミュニティの拠点であり、まちづくりのエンジン

高崎小学校への小規模特認校制度の導入の発端は、地域振興である。

高崎小学校は児童数の減少が続き、近い将来、複式学級が想定されるなど、いずれ統廃合を検討しなければならない学校であった。学校と地域振興は密接に関係している。学校がなくなった地域では、子どもの数が減少する傾向にあるという。子どもを持つ若い世代が地域の外に流出することが原因のようだ。若い世代を失った地域は、過疎化が進行し、あつという間に活力を失う。

全国的には廃校になった校舎を地域コミュニティの場として利活用している事例もあるが、子どもたちの元気な声がこだまする学校は、それだけで強力な地域住民の求心力となり得る。学校は地域にとって教育の場であるとともに、地域コミュニティの拠点であり、まちづくりのエンジンなのである。

### おらだの学校の存続

高崎小学校がある高崎地区は、市の東に位置し、昭和の大合併により東根市となった旧高崎村だ。地区人口は約1,600人。年々、減少傾向にある。

高崎地区では毎年5月、明治時代から続いている地域行事「だんご運動会」が開催される。地域の老若男女はもちろん、地域外に住む高崎出身者も参加する地域の一大イベントだ。正式名称を「高崎小学校創立記念高崎地区民だんご大運動会」といい、地域行事でありながら小学校行事としても位置付けられている。学校と地域が密接に関係している一例であるが、地区民にとって高崎小学校は、まさに「おらだの学校」なのである。

平成25年8月、高崎小学校の活性化と地域振興を目的とした小規模校活性化計画の策定委員会が発足した。高崎小学校存続に向け、舵を切ったのだ。その後、3回の策定委員会を経て平成26年4月に計画が策定され、高崎小学校に小規模特認校制度を導入することが決定された。

自治体の多くは効率性を求める観点から行政主導で統廃合を進めるが、本市としてはその方法とはならない決断である。

### 3つの「変わる」

小規模特認校制度を導入すれば、それだけで他学区から児童が通うようになるわけではない。高崎小学校を通いたくなるような特色ある学校にする必要があった。

そこで、まず取り組んだのは、3つの「変わる」を柱とした取り組みだった。

1つ目の変わるは「授業が変わる」である。授業では英語活動の充実を図った。具体的には、今、5・6年生が週1日1時間の英語学習をしているが、全学年で英語に触れることができるシステムを作った。ALT(外国語指導助手)を週3日配置。外国語以外の授業にもALTが入るようにして、児童と一緒に音楽の授業を受けたり、休み時間を一緒に過ごしたりと、英語のあることがあたりまえの環境づくりに取り組んだ。

2つ目の変わるは「放課後が変わる」である。児童たちは、基本的に週2回、放課後に開催されるアフタースクールに参加する。アフタースクールとは放課後教室のことで、ニュースポーツや芸術活動、教員OB・大学生による宿題アドバイスやALTによる英会話教室など、幅広い体験をすることができる。

3つ目の変わるは「地域が変わる」である。アフタースクールは地域住民が組織する高崎地区アフ



ALTと過ごす学校生活

タースクール運営委員会が企画、運営、メニュー作りを行っている。他地区の児童も地域行事に参加できる環境を整えるなど、地域ぐるみで、この制度を支援している。

### 新たな挑戦。教育によるまちづくり

教育と地域づくり。以前は別々のものとしてとらえていたが、学校の存続が地域に大きな影響を与える現状では、これらを併せて考える必要があるだろう。さらに地方創生が叫ばれている今、地域振興において学校が大きな役割を果たしていくに違いない。

そして本市は今、地域振興に大きな役割を果たす教育から、教育によるまちづくりに向け、新たな取り組みに挑戦している。

平成28年4月には、県内初となる併設型中高一貫校・東桜学館が、市内に開校した。

また本市においても平成28年度から学力向上支援や理数英の興味関心を醸成するなど、教育力向上の事業展開を予定している。地域を誇りに思う教育を進め、次代の担い手として地域に貢献できる子どもを育てるために、郷土愛を醸成する教育も進めていく。

高崎小学校の特色ある教育に賛同し、高崎小学校を選んだ保護者や児童がいるように、本市の教育に魅力を感じ、東根に住むという選択をする方もいるに違いない。

教育によって人がはぐくまれ、そこで育った人たちがまちをつくる。「教育によるまちづくり」。本市の挑戦は始まったばかりだ。